

十月のテーマ

書物という友



え・浅妻健司

先人に学び 頂点を極める

同

じ時、同じ場所で、同じ人を見た時に、人は必ず同じ捉え方をするでしょうか。

答えは「NO」です。それはなぜでしょうか。十人十色と言われるように、人によって、考え・好み・性質などが異なるからです。

例えば、AさんはCさんを見た時に、「この人は、性格が明るい人」と捉えました。同じ時に同じ場所で、BさんはCさんを見て、「この人は、性格が暗い人」と捉えました。同じ時刻に同じ場所で同じ人を見ても、捉え方の違いで、Cさんは明るい人にも、暗い人にも映るのです。

この捉え方の違いは、人に限らずあらゆる事物や環境、状況においてもあてはまるでしょう。

これを今週のテーマである「書物という友」にあてはめて考えてみると、本は読む人の捉え方によって、その内容はいかようにも変わるということなのです。

M氏は、実業家である故・松下幸之助氏の言葉に触れ、ものの捉え方に深い感銘を受けました。そ

れは、次のような内容でした。

「経営の神様」と呼ばれた松下幸之助氏は、戦国の名三武将である織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の特徴が表われた歌を見て、「鳴かぬなら それもまたよし ほととぎす」と詠ったと言います。そして、社員に対し、「自分は、信長、秀吉、家康よりも偉い」と語ったそうです。

自身を三武将よりも「偉い」と言った松下氏は、信長の良いところを社員に伝えました。次に、「秀吉はもつと偉い。それは、信長の良いところと悪いところを学んで活かしたから、秀吉のほうが信長よりも偉い」と言い、続けて、「秀吉よりも、家康のほうがもつとと偉い」と語りました。

この内容を読んでおわかりのように、松下氏は「三武将の良いところと悪いところを学んで経営に活かしたから、自分は偉いんだ」と社員に伝えたかったのです。

これだけの話であれば、単なる社長の自慢話で終わってしまいます。しかし、この話には続きがあ

るのです。

「けどな、キミの方がもつと偉くなれるんや。信長と秀吉と家康とボクの良いところと悪いところを勉強して、仕事に活かせばええんや、だからキミが一番偉くなれるんや」と言ったのです。

つまり、先人の成功体験と失敗体験を学び、社長である自分をも反面教師として、自己を成長させる糧にしなさいということを社員に伝えたかったのです。

人により価値観は多様です。しかし、今まで自分が知っていたことであっても、捉え方を変えることによって、それが新たな学びに変わることもあります。松下氏のエピソードは、それを示してくれているのではないのでしょうか。

本は、今を生きる私たちがより良い人生を歩むために、先人が遺してくれた人生訓です。

書物を通して新しい発見や気づきを得て、新たな人生の一ページを築いていきましょう。

参考資料『大切なことに気づかせてくれる33の物語と90の名言』西沢泰生（かんき出版）